東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第５回（前編）

**◎支えている人／話し手：鈴木綾さん**

高校の教員を経て、不登校の子どもや孤立する若者の教育機会つくりや就労支援などを行ってきた。

専門性は名乗らず特に旗も持たずに依頼をくださる団体から頼まれた事を何でもやってみる事を続ける日々。実績としては、子ども若者支援団体のスタッフ養成プログラムつくり、非営利組織のチームビルディングワークショップ、ファシリテーション講座等。

NPO法人アスイク常務理事、一般社団法人若者協同実践全国フォーラム理事、こおりやま子ども若者ネット代表。

**震災が起こるまで**

僕の活動分野は、不登校、ひきこもりと呼ばれる分野で、もともとは高校の教員でした。学校に勤めているといろいろなこどもたちが見えてきて、学校を批判したいわけではないのですが、端的に言えば学校だけでは足りないなと思い始めました。学校はいいところもあれば合わない子もいっぱいいて、世の中は学校に合う子にはいろんなリソースが集まるけれど、学校に合わない子たちにはほとんどリソースが割かれていないと思ったんです。今は教員不足で、教員になる倍率が１倍とか２倍で、教員になる人が少なくて困っている自治体もあるようですが、僕の時代は30倍、40倍は当たり前でした。学校の先生になろうとしている人がこんなにいるから、自分は学校ではない、学校のようなものを作りたいなと思ったんです。そこでフリースクール作りを始めた、というのが活動のきっかけです。

2002年に始めて、当時地域で活動していた若者たちと合流して、ビーンズふくしまというNPOで活動に参加しました。考え方というかフリースクールの場では、社会人になるためのトレーニングというよりも、こどもたちの主体性や自主性を中心に、自分たちもこどもたちと協働するというか、一緒になって学びを作ることを旨としていました。でも、ボランティア希望の方に叱りつけられることもありました。例えば、こどもたちが敬語を使わなかったり、みんなで話し合いをしようというミーティングの時に、立ってお菓子を食べながら話している子どもがいたりするるんです。今でも自分は何も感じないんですけど、気になる人から見ると、「この子ら問題だろ！」と。でも僕らは、「何が問題なんですか？」「問題と思うならこどもと話し合ってください。」と伝えていました。あなたの価値観がそういうものだったら、怒るとかじゃなくて、話し合ってみたらどうですかって。そんな立場でいろいろ活動してきました。なかなか通じないこともありましたけどね。

フリースクールだけやってたんですけど、フリースクールに関わっていると、貧困とか親子の関係とか、いろんなものが見えてきたんです。当時、20代の若者３人くらいでやっていたのですが、貧困のこともやりたいとか、地域のコミュニティではフリースクールだけじゃなくて青年期、ひきこもりのこどもたちも困っているとか、いろんなことがあって、事業を増やしていきました。時が2000年初頭だったので、若者支援分野などで行政の委託事業も始まった時期で、法人が委託事業を使いながら大きくなっていきました。2011年は事業が10くらい、福島市と郡山市で活動があって、スタッフも20～30人くらいに増えていました。そこは自分たちも苦労したんですけど。大きくなればいいってわけでもなくて。そんな時に東日本大震災が起こりました。

**被災しながらの支援**

まずは、自分たちもどうしよう、と。自分たちも被災しているし、スタッフの中には沿岸部に実家があって、実家が津波の被害に遭っているという話も多くあったので。けっこう悩んだんですけど最初に取り組んだのが、ビッグパレットふくしまという避難所での活動でした。会議やコンサート、イベントなどをやっているコンベンション施設で、3月13か14日に沿岸部の人たちが2000人避難してきたんです。原発事故の影響で。その時期は、避難地域が3キロ、5キロ、10キロ、15キロとどんどん広がっていて。郡山は原発から50キロなんですけど、自分たちも外にも出られないし避難しなくてはいけないのではないかという時期でした。サポートしていた家が車持っていないとか、車はあるけどガソリンがないとか母子家庭でちょっと母親が疾患を持っているとか、フォローしなくてはいけない人達もいて。その人達たちに関しては、水や食料は届けられていたんだけれども、特別な配慮が必要な子たちもいたので、避難所は難しい、どうしたらいいんだろうということがありました。とりあえず、コミュニティの中で車持っている人のリストアップをして連絡を取って、避難指示が出たらだれがだれを連れて逃げるというのだけ決めて。という最中に2000人、避難してきました。ビッグパレットは2000人ですけど、郡山全体でみるともっと避難者が入ってきたんですね。そっちはそっちで放っておけないというか、これも大きな大変な問題だなと思って。当時道路はばきばきで、車は走っていましたけど、自衛隊の車もたくさん走っている状況でしたが、動けるメンバーで、自分たちは自転車でビックパレットに行ったりしていたんです。こどもたちはやっぱり居場所がなくて、緊張状態ではあるけどあそびはしていて、避難所の中で怒られちゃうというのもあって。けっこう苦労が見えました。でも僕らはビッグパレットで何かやったかというと、こども向けにはやらなくて。というのも色々な団体の方とかいろんな方があそび場つくりをやってくれて。こどもは不思議、というか大人がそうさせているのかもしれないけれど、そんな時でも学習帳とか持って、そういう部屋でドリルとかやっているんですよね。こういう時にもドリルやるんだとか、不思議に思ったんですけど、まぁあそび場のほうは他の地元の人たちがやっていました。

当時はいろんな団体が宮城や岩手に入ったと思うんだけど、福島はとかく遅かったんですよね。それも連絡がきて、放射能に対する団体内の基準が設けられていないから、職員派遣ができないって。この線量だったら派遣ができるとかできないとか、そもそも基準がないんだって、支援が入って来なかったんですね。あと、ボランティアバスが関東から福島を避けて宮城や岩手に入っているっていうのは言われていたけど、実際福島にボラバスなんて来ることはあんまりなくて。個人でワゴン車に調理道具持ってくる人たちはいたけど。本当に僕ら孤立しているなって中で、地元の人たちがそういうあそび場を作っていて。僕らはもうすこし面的に見ようということで、情報誌を作って配っていたんです。急に生活がむき出しになって、段ボールで隣あって暮らしていて。誰だかわかんない人が生活空間の横を行き交っているんですね。けっこうストレス感じていらっしゃっていて。急に、困りごとありますかって聞くのもはばかられるような状態で。だから、地元の情報誌みたいなのを作って、近所にあるお店だとか、ここの店は開いているとか、ちょっとした４コマ漫画みたいなのも載せて、段ボールの中で暮らしている方々に渡して、そうすると雑談が生まれて、こういうことが困っているんだ、ああいうことが困っているんだって聞かせてもらうっていう状態でしたね。だから、こども特化というよりも、全体的に何が困っているのかっていうのを聞いていました。

**避難所で暮らせない**

その中でも、避難所に暮らせないこどもたちもやっぱりいて、駐車場で生活している親子がいました。ビッグパレットの中もいい環境じゃなかったんですけど。その親子は、こどもが聴覚過敏で、泣いたり叫んだりしちゃうからいれない、あの中で暮らすのは難しいと、軽ワゴン車の中で４人、両親と姉と妹で暮らしていました。これは難しい、忍びないなと思って。そもそも障害ってどういう定義かっていう話で、一旦僕が今使っていたのは、障害福祉手帳を持っているという意味でしたが、障害福祉手帳を持っていない人もいっぱいいたんです。後にわかったのですが、中学校までは特別支援学級に通っているんだけど、沿岸部には福祉団体が少ないので、卒業してから受給者証を取って福祉サービスを受けるということをしていなかったそうです。けど、沿岸部のほうは地域包摂されていたとの話も後に聞きました。親戚が縫製工場やっていて、そこで働いていたとか、労働市場じゃないけど、畑仕事とか野良仕事とか、親戚の手伝いをしていたとか。郡山だと労働市場につながるか、福祉サービスを受けるかなどの接続の仕方で、その家庭を支えている形態だと思うんですけど、沿岸部は決してそれだけじゃなくて、昔ながらのつながりの中で包摂されていた。そういう人たちが少なくなくて、中学校までは特別支援学級の枠で生活されていた方がこっちに来て、障害者施設を使えるかっていうと使えないんです。避難所も障害者の方の特別避難所もあって、特別な配慮ができることにはなっているんですが、受給者証がない。そういった人、制度の狭間の人がとても困っている事態があったかと思います。

**居場所作り**

そのあとは居場所作りをしました。ゴールデンウィークくらいに、ビッグパレットのような一次避難所から人がほとんどいなくなるんです。引っ越しの手伝いもいろいろしたんですけど、避難所から応急仮設に移動したんです。そこで、当時そういうところをサポートしていた社協の方が言われていたのは、居場所やコミュニティがほしいということでした。こどもたちって学校だったりクラブ活動だったり、地元の子ども会だったりで、親同士こども同士つながって、家庭じゃなくて地域の中に暮らしている状況があるけれど、避難してくると、学校もない、クラブ活動や習い事も、子ども会、地域のなんとか会もないし、分断されてしまう、と。単純にこどもたちの居場所がほしいということだけじゃなくて、コミュニティをちゃんと作らないと、難しい子がさらに難しいというか、見過ごされてしまう、ということがあってはならないと思いました。なので、そういうコンセプトでやりましょう、ということで活動しました。“おだがいさまセンター”という、郡山の大きな応急仮設の中に高齢者支援拠点があるのですが、そこで活動を開始しました。普段フリースクールでやっているような、こどもらがやりたいことを一緒に考えて、料理したりあそんだり、時にはどこかにバスを借りて遠征したりとか、そんなことをしていましたね。ただ本当に、あそびとかそういうチャンネルでいうと、野外で活動していいものか、ということが。保護者の考え方も様々だし、そこはけっこう苦労しました。ただ、この表現も気を付けなくてはいけないと思うけど、放射能に対して恐怖が強い人は、割と県外避難しているんですよね。僕らのところにいる子、もしくは家庭は、そんなに野外に出るのをこわがっている子は少なかったんです。だからと言って、手放しにOKということではなかったけれど、保護者の意向を聞いたり検討したりして、どこまでをOKするかというのは慎重にやっていました。けど、こどもたちが何したいっていうのの１位は、体を動かしたいっていうことで。当時ぼくら三春町で応急仮設をサポートしていたんですけど、そこに住む富岡町のこどもたちの仮設の学校はタイヤ工場の跡地でした。こどもたちは学校じゃなく工場って呼んでいました。で、そうすると校庭がなくて十分にあそぶ場所がない、部活動もない。応急仮設は歩いて通えないし点在しているので、バスに乗って帰るから放課後もない。あるとすれば僕らのところで、家に帰らないでバスで僕らのところに来る。僕らのところに来た後で、夕方は保護者が迎えに来るって状態だったんです。そんな状態なので、やっぱり体を動かしたいっていう話が多くあって、僕らは公園あそびとかを一緒に、それこそ線量を測りながらやっていました。

**先が見えない避難生活**

そんな中でも、どうしようもできないなと思ったこともありました。それは避難解除の見通しが分からないところで、すごく苦労して、こどもたちも毎春涙がけっこうあって。避難解除って、今は双葉や大熊の話が少し出ていて整理されていますけど、当時は全然わからなかったんです。突然、避難解除、町が帰村宣言を出す。で、みんなで戻ろう！って。それ自体は、地域の暮らしを取り戻そうとする大きなチャレンジだと思うんですけど、こどもらにとっては寝耳に水なんですよね。一時避難所、二時避難所と避難して、いろんな苦労をしているんです。当時のアンケートで避難回数を聞いたのですが、記憶ですみませんが、5回以上避難場所を変えているこどもの数は、7割くらいなんです。ずっと移動、移動、移動で…でも、自分の10代やこどもの頃を考えてもそうですが、友達ってすごく大事で、避難場所が変わりつつも、こども同士なんとか連絡を取り合って、僕らのところで会ったりしていたんです。別々の避難所にいても。でも、一方の家族は帰村する、とか、もう一方の家族は帰村したいけど自分の家族に障害があったりすると、医療や福祉サービスがないわけだから自力で生活していかなきゃいけなくて、この家は避難生活を続けなくちゃいけない、とか。いろんな事情があって、移動を余儀なくされる状況が数年続くんですよね。これはすごく特殊だったなと思います。日々安心して暮らす場、学ぶ場、遊ぶ場を奪われて、継続的な視点で、どこでどういう風に学んだりあそんだりということが読めないし、それどころかある日突然、避難解除！みたいなことがあって。苦労というか本当にやるせない場面はいっぱい見せられたというか。そんなことがありましたね。そんなことが当時やっていたことでした。ざっくりですが。来年震災10年なのに、東京オリンピックとコロナで、東日本大震災の清算はされないんじゃないかと思って、自分の話す機会もなくつらつらと話しちゃいました。

後編に続く